

寅さんと大阪万博 その心は

吉見俊哉『万博幻想―戦後政治の呪縛』ちくま新書、2005 年は、寅さんシリーズで知られる山田洋次が 1970 年に監督した映画「家族」の紹介からはじまる。日本の高度経済成長の光と影をリアルに伝える映画であり、私も大学の講義などでよく紹介した。写真は『万博幻想』冒頭に掲載の 1970 年大阪万博の風景。太陽の塔が見える。

朝日新聞 2 月 7 日の表題「社説余滴」も、映画「家族」や「寅さん」にも触れている。

「寅さん」と「大阪万博」には、浅からぬつながりがある。それぞれに裏表で関わる言葉は「経済成長」だ。国民的映画「男はつらいよ」シリーズを手がけた山田洋次監督にうかがったことがある、



「経済成長とは縁のない上昇志向ゼロの男として映画化したんです、寅を」。第 1 作は大阪で開かれた日本万国博覧会の前年、1969 年の制作だ。

経済成長とは無縁の寅さんに対し、高度経済成長の象徴と見られてきたのが、70 年の大阪万博である。「人類の進歩と調和」をテーマに、延べ 6421 万人の入場者を集めた未曾有の大イベント。監督は、この万博を織り込んだ映画を、万博開催の年に撮る。「家族」である。

長崎の炭鉱労働者一家がヤマを離れ、北海道の開拓地まで旅する物語。途中、一家は万博に立ち寄るが、混雑で会場に入れず、雑踏で疲弊し、東京まで来た時点で娘が息をひきとる。万博を「命の陰り」の暗喩として表現されたのでしょうか。そう問うと、監督は黙ってうなずいた。

「万博は未来の幸福を描いているか。幸せとは、という考察を離れ、物質的な豊かさを追い求めているのか。暮らしや家族が壊れてしまわないか」。万博ロケで自問を続けたという。監督はこの作品や寅さんシリーズで、失われてしまうかもしれぬ人の情や触れ合い、心の豊かさを問うたのだ。経済成長主義への疑問を抱きながら。

4 年後に再び大阪で開催される万博の基本計画が昨年末発表され、今年から準備が本格化している。70 年万博は科学技術がもたらす明るい未来を描いたが、地球温暖化などに見られるように、必ずしも現実はそうとはならなかった。

25 年万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマだ。空飛ぶクルマなど華々しい最先端技術が披露されるが、またも技術礼賛に傾き過ぎはしないか。

寅さんを演じた渥美清さんは四半世紀前に亡くなったが、監督によれば寅さんはまだ、旅を続けている。いのち輝く社会とは。未来は幸せだろうか。

情に厚く、「脱成長」を地で行く寅さんの目に、4 年後の万博はどう映るだろう。

(2021 年 2 月 12 日)